

JASTEC 関西「論文研究会」

JASTEC 関西の研究部会「論文研究会」では、児童英語教育、小学校英語活動、早期外国語教育関係の論文・学術研究資料・実践報告の著者や専門家を招いて、研究・論文執筆にあたっての経緯と留意点、及びそこから現在に繋がる研究プロセスのご報告をいただきます。小学校英語活動の実践者や、研究者・大学院生でこれらのエリアで研究テーマや手法に興味を持っておられる方が毎回十数名参加されています。非会員の方の参加も歓迎いたします。どうぞふるってご参加下さい。次回の案内詳細は随時下記、及び学会 HP に掲載いたします。

連絡先：連絡先：植松 茂男（京都産業大学）

uematsu[at]cc.kyoto-su.ac.jp （[at]を変換してください）

これまでの活動(最近のものから)

2012年度

第4回研究会 日時：5月12日（土）14時から17時 於、大学コンソーシアム大阪「ルームA」

大阪駅前第2ビル4階

参加者 14名

発表タイトル：「新教材を研究しよう！」

講師：福智佳代子（神戸海星女子学院大学）

今回講師の福智先生は、まず新教材の特徴をこれまでとの新旧比較によって解説された。

そのあと、参加者が実際に2つのグループに分かれ、歌やロールプレイなどのアクティビティーの使い勝手を体験してみた。体験後のフィードバックとして、実際にクラスで使う際にグループワークでは使いにくいなどの指摘があがった。さらに個人がPCを相手に作業をするということになりやすいとの指摘もあった。使いやすさの点で言えば、英語ノートの方が勝る点もあるので、両者の併用が望ましいと考えられる、との指摘が多かった。デジタルコンテンツは使いやすくなったが、言語文化面の配慮がされていなかったのも残念に思うという意見もあった。

その上で、新教材についての改善点について協議した結果、二つの事項が指摘された。

- (1) 世界の挨拶が既に地図の上に貼り付けられ、ヒントを出して答えさせられない。
- (2) 2の3で I can ... は使いやすい場合とそうでない場合がある。特に can' t の利用場面で「能力」を問うような質問があり、非常に問題点を感じる。

さらに続いた意見交換では、「提示は電子黒板が効果的だがアナログのプリントアウト

した教材を交互に使うとさらに効果的である」との意見や、「英語ノートやウェブリンク等との使い分け、デジタルとアナログの使い分けが大事である」との指摘もあった。さらに、文科省はデジタルコンテンツを見て先生が「イマジニア」になることを意図している、との本質的な指摘もあった。

これからの方向性として「アナログ・デジタル研究会」のような実際の現場からニーズにあう研究をすることが本研究会にも求められている、との指摘もあった。

文責：植松茂男（京都産業大学）

（当日の風景）



2011年度

第3回研究会 2011年9月24日(土)14時から17時 於、城北市民学習センター

講演内容：「小学校と中学校をつなぐ寝屋川市の英語教育：行政の視点から」を基にレクチャー・討議。

講師：柘井政明先生（国松緑丘小学校校長・元寝屋川市教育委員会教育指導課指導主事）

吹原顕子先生(第五小学校教頭・元寝屋川市教育研修センター指導主事)

テキスト論文：JASTEC紀要第30号(2010)、pp.123-137.「小学校と中学校をつなぐ寝屋川市の英語教育：行政の視点から」

（報告）

2005年度からの特区認定経緯の振り返りから解説が始まった。この特区終了後、文科省「寝屋川市小中学校英語教育推進地域・教育制度特例校制度」（寝屋川市が命名！）として2009年からも継続。

行政による教育施策の説明の中身については、特区当初から「どこの学校でも同じ教育を受ける機会があること」を前提に、2005年度以降、「1中学、2小学校」の校区パターンを確立し、「小中の一貫教育」を目標にしてきたという。

現在、寝屋川市では特別予算を組み、小学校英語教育支援者12名、外国人英語講師12名を擁している。さらに小学校6年生は児童英検全員補助受験全額補助。8割がブロンズを取得。中学校は2年生に1300円(英検4級全額補助)、1年生、3年生には受験時に1000円の補助を行っている(すごい!)。本実践報告執筆後にも、授業を見て講師に指導助言を仰いだり、出席者が互いに意見交換をする「中学校授業実践研修」(2010)、や「小学校教科担当者研修」(2010)、小中連携にポイントを置いた「初任者研修」(2010)、「小中学校教員派遣研修」(2011、東京)などを追加実施している。

これからの行政の課題は、小学校では学校間の横のつながりを活性化すること、さらに「英語ノート」にかわる指導の手引き・教材作成をすること、また海外の同年代との生徒との交流を目指した活動の充実である。また中学校においては、文字指導、辞書指導の充実が喫緊の課題であろうと指摘される。

国の外国語教育施策を先取りした枠組みの先見性。さまざまな制約のために継続・定着することが実に困難な「特区」事業。その中で新たな取り組みで日々進化する寝屋川市の「国際コミュニケーション」授業の懐の深さを、発表・忌憚のない質疑応答を通じて感じたすばらしい機会であった。

文責：植松茂男(京都産業大学)

(当日の風景)



第2回研究会 2011年5月7日(土) 9時半から12時 於、城北市民学習センター
講演内容:「児童の身体反応と情動に関する研究:リズムと身体運動を重視した指導の結果」
講師:山本玲子先生(京都教育大学附属京都中学校)

テキスト論文:JASTEC 紀要第29号(2009)、pp.31-45.「児童の身体反応と情動に関する研究:リズムと身体運動を重視した指導の結果」、及びJASTEC 紀要第28号(2008)、pp.65-84.「中学校への効果的な接続のための小学校高学年カリキュラム:身体性を中心として」

(報告)

講師紹介の後、発表は、研究内容についての背景紹介に始まり、本論文内容「児童の身体反応と情動に関する研究：リズムと身体運動を重視した指導の結果」である実験群・統制群の有意差、身体運動、チャンツの優位性についての紹介をされた（上記 JASTEC 紀要 29 号参照）。これに対して、様々な視点から、質疑応答など活発な討議が行われた。山本先生は、本論に入る前段階で、取り組みの概念に馴染みのない参加者のために、理論から丁寧に説明して下さった。その後中学生でも小学校英語活動で学んだ素地を大いに伸ばせることを理論とご自身の複数の研究論文で示して下さった発表であり、大変具体的で、示唆に富んでいた。その後の懇親会では、山本先生への教室内での具体的な指導方法等、更に活発な情報交換が生まれた。

文責 福智佳代子（神戸海星女学院大学）

講師：山本先生



2010 年度

第1回研究会 2011年1月29日（土） 14時から17時 於、常翔学園大阪駅前センター
講演内容：「現代アメリカにおける4ブロックス・アプローチの理論と実践」-ホールラン
ゲージとフォニックスの統合を目指して-

講師：赤沢真世先生（立命館大学准教授）

テキスト論文：JASTEC 紀要第 26 号(2007), pp. 1-13. 『現代アメリカにおける4ブロックス・ア
プローチの理論と実践』-ホールランゲージとフォニックスの統合を目指して-

(報告)

第1回 JASTEC 関西「論文研究会」が大阪駅近くの常翔学園大阪センターにて、15名の参加者のもと開催された。冒頭に30分程、会の世話役を務めて下さっている京都産業大学教授の植松茂男先生より「JASTEC 関西論文研究会」の誕生の経緯、会の趣旨、論文の構成や論文作成にあたってのポイントなどの解説があり大変参考になった。「若い研究者のお手伝いをしたい。」と言う言葉に、心強く思った大学院生が多かったのではないだろうか。

赤沢先生は、4ブロックス・アプローチの理論に入る前段階で、ホール・ランゲージに馴染みのない参加者のために、ホール・ランゲージの理論から丁寧に説明して下さいました。ホール・ランゲージとフォニックスは一般的に相反する対象的なものと捉えられているが、実はホール・ランゲージにはフォニックス的学習も含んでいるとのことで、両者をバランスよく取り入れ生まれたのが4ブロックス・アプローチであるという。四つの各々のブロックを例を用いて詳細に解説して頂いた。今後の日本の英語活動には音素の気付きを高める指導が必要であるとの示唆があった。

講義の後、会場から、もともと第一言語習得の研究方法としてのホール・ランゲージが第二言語習得にあてはまるのかとの質問があった。ESL でもホール・ランゲージが有効との研究があるとの赤沢先生からのお答えがあった。そのほかにも、参加者との活発な質疑応答がおこなわれ、あっという間の短く大変充実した3時間であった。

その後の、インド料理店での懇親会では、赤沢先生が他のホール・ランゲージ研究者と共にホール・ランゲージ研究会を立ち上げたとの情報を得るとともに、研究会場の申し出があるなど、更に活発な情報交換が生まれた。

文責 高田悦子 (大阪キリスト教短期大学)

講師：赤沢先生

